

音と看護のかかわり

素材 患者に不快を与える音についての一考察

素材をめぐって 看護は“音”にどうアプローチすべきか

本誌創刊以来つづけられてきた“研究者とともに”の欄が、本号より“Conference”という名に衣替えして登場することになった。そこで簡単に趣旨を述べさせていただこう。

“研究者とともに”は、提出された研究素材を中心に、レポーターからその動機、目的、経過などの説明を受けた上で、各出席メンバーによってそれぞれ専門的立場から、研究の方法、内容に関して批判と指導をいただき、今後の看護研究発展の資とすることをねらいとした。

この線にそって“研究者とともに”はつづけられてきたと思うが、ともすれば、研究のための研究談義といった要素を指摘する読者もないではなかった。

自己の研究に対し、各方面からの手きびしい批判を受けることは、研究者本人にとってはむしろ歓迎すべきことであって、決して回避すべきでないという編集部の方針は変わるものではないが、真にシビアな批判とそうでないものとの選択という点では、いささか反省の余地があったといえよう。

“Conference”は、批判のための批判からの脱出を願う。批判の上に開く花に期待し、そのみのり多きことを念じる。研究者には、俎上の鯉ではなく、大いに語ってもらおう。できあがった研究そのものと同時に、そのプロセスについても十分に話し合い、そこで発見される可能性の芽は、みんなで大切にしていきたい。

第1回として取り上げた“音と看護のかかわり”は、上記の意図を100%満たしているとはいえないかもしれないが、テーマの新鮮さと、今後この種の研究を発展させるために必要な内容は、できるだけ盛り込んだつもりである。次号以後の読者の協力をお願いするしだいである。

<編集部>